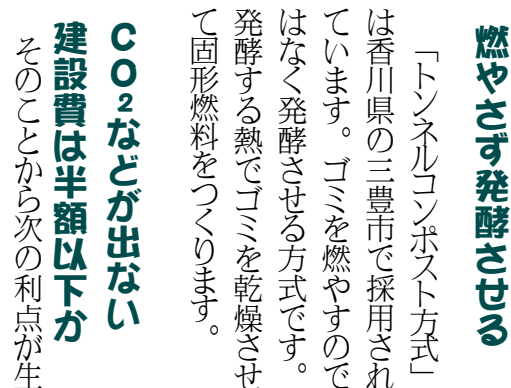


焼却しない発酵乾燥 トンネルコンポスト 方式へ



② 複雑な焼却施設とは異なりシンプルな発酵・乾燥施設なので、安全面でも財政面でも大幅な改善がもたらされる。現時点で290億円の建設費用は半額以下になると考えられる。

「CO₂を出さず、費用が少ない」これは私たちが指摘してきた「2つの負の遺産」を解消する方式です。

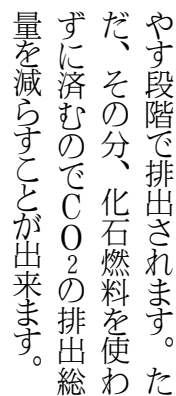
ゴミ増量の可能性 固形燃料の買い手は

① これまで進めてきたプラスチックを分別しゴミを減量する流れとは逆に、混合しゴミを増量する流れに戻る可能性があります。

② 生産される固形燃料の安定的な買い手が必要なことです。三豊市では、近隣の大手製紙会社から「固形燃料を全量引き受ける」との確約を得ています。

時にCO₂が出るが

③ CO₂は、ごみ処理場ではあまり排出されませんが、固形燃料を利用して燃



方針転換へ意欲を示す
管理者（和田彦根市長）

現時点で、管理者（和田彦根市長）は、これまでの方針を撤回するとは言っていないが、方針転換への意志は明白です。

同市長は15日の臨時会で次のように述べました。「トンネルコンポストは新しい特殊な技術ではなくヨーロッパでは当たり前の方式だ。

日本の人口は、世界80億の70分の1、陸地面積は360分の1だ。その日本に世界の焼却炉の実に70%がある。ヨーロッパの町がどうなっている

化け物はいらない

荒神山に 大金を食らい大量のCO₂を吐き出す

のか、その情況を含めて検証したい。過渡期で難しいかも知れないが、今、焼却炉を作ったら目も当てられない状況に來ている。多少の困難を乗り越えていきたい。一番大事なことは営業だ。」

「ごみの半減」

根本目標を掲げた

何が彼の背中を押したのか。まず1つは、「守る会」が「ごみの半減」という根本的解決の目標を掲げて運動したことです。上勝町の笠松元町長をお招きした「5・15ゴミ半減のつどい」をきっかけにして、その流れが関係者や住民に広がっていききました。

その背景には、長い夏日、異常な豪雨、超大型台風、ヨーロッパの森林火災など、目の当たりにする地球温暖化の現実に対する世界と地域住民の危機感がありました。

犬上3町で「ごみ半減計画策定」の請願採択

2つめは、犬上3町で「ごみ半減計画策定を求める請願」が採択されたことです。「ゴ

ミ半減」は議員が普通に考えれば必ず賛成する内容でした。だから、党派を超えた議員の皆さんが「守る会」の請願の紹介議員になりました。

全ての市町が「ゴミ半減」をすればゴミ処理施設の規模は半分で済む。当然、計画中の大型ごみ処理施設は不要になる。3町での議会請願可決の流れが決定的な力になったと思われる。

「住民説明会」が

住民討論の場に

3つめは、その議会の様子が「住民説明会」で紹介され、その場が真剣な住民討論になったことです。「荒神山を守る会」を始め多くの参加者が率直な意見を述べました。

当初「ごみ半減などできない。無理な目標を立てると逆効果になる」と強弁していた事務局が「市町が半減を決定するなら処理施設の規模を縮小する」と言わざるをえなくなりました。

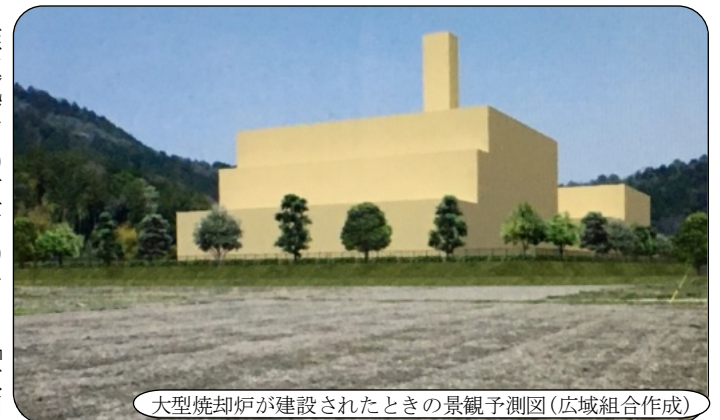
「膨大なCO₂と莫大な財政負担の責任を誰がもつのか。事務局がもてるのか。広域組合の議員がもつのか。市町の議員が持つのか。誰も持たないから最後は住民のところへ付けが回るのはないか」という指摘に、会場は静まりかえり、事務局は一言も答えられませんでした。

広域組合は、守る会が提起する「2つの負の遺産」の指摘に回答不能になったのです。

ギリギリの時点で

思いがつながつた

こうした事態を前にして、



大型焼却炉が建設されたときの景観予測図(広域組作成)

推進勢力の圧力の中で「大型焼却炉」を強力に推進する発言を繰り返していた管理者和田彦根市長が「今が転換の時」と判断したものと思われる。彦根市長は就任当初から、前市長時代のツケ・財政不足に悩まされており、財政問題の解決には執念を燃やしてきました。その思いと住民の思いがギリギリの時点で繋がったものと思われる。

「ゴミ半減」貫き財政負担とCO₂を減らす

「守る会」は、これからも「ゴミの半減」の方針を貫き、様々な運動を進めます。どんなごみ処理方式になるにせよ、ゴミの抜本減量こそがCO₂を減らし財政負担を減らすことになるからです。

広域組合が踏み出しつつある「大型焼却施設からの撤退」を支持し、さらに促します。同時にトンネルコンポスト以外の方法も視野に入れて、よりよい処理方法を検討し提案していきます。



現在の荒神山と麓の建設計画地